

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520573

研究課題名(和文) 英語習熟度の低い日本人大学生の間言語に見られる借用を分析するためのコーパス構築

研究課題名(英文) Small-scale building of learner corpora for analyses of L1-influenced errors made by Japanese university students

研究代表者

内田 充美 (UCHIDA, Mitsumi)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：70347475

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：大学英語教育が取り組むべき課題のうち習熟度の低い学習者に対象を絞り、整った英語の文章を書くことができるようになるために何が問題となっているのかを明らかにすることを主たる研究目的とした。

そのために、まず、中間言語資料(大学生の書いた英文)を継続的に収集し、自前の学習者コーパスとして利用できる手順を確立した。作成した資料の分析から、日本語の文法に引きずられたと考えられる誤用(母語の干渉)を幅広い範囲で確認した。

これらの特徴はいずれも対照言語学的に見ても意味深いものであり、英語と日本語のように言語間距離が大きい場合においては特に、言語学の知見に基づいた指導が有効であることを示しているといえる。

研究成果の概要(英文)：Our study aims at improving English writing ability of Japanese university students at their earlier developmental stages. Pointing out major common factors behind the apparently varied types of errors has been the practical goal of this project.

We collected writing data through learning activities using LMSs and blogs. A practicable way to build home-made learner corpora, which is feasible without the help of IT-specialists, was established. Our data showed extensive L1-influenced errors, among which are confusion of subject and topic, inappropriate omission of known information, and confusion of argument structures.

When learners face difficulties trying to write in English, it appears, their L1 often provides the only grammar they can rely on. As the linguistic distance between the L1 and the target language is significant, this leads to various types of errors. The results obtained indicate that contrastive linguistic knowledge on the teacher's side will help learners' progress.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：母語の干渉 対照言語学 学習者コーパス 中間言語 大学英語教育

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 教育現場の状況

高等学校までの英語教育においてコミュニケーションタイプな指導が主体となるなか、大学新入生の英文法の習熟度の低下が指摘されている。また、そういった指導ではオーラル面に重点が置かれることが多いため、整った英語の文章を書くことが非常に不得意であるという傾向がみられる。

いっぽう、多くの大学においては英作文の授業は英語母語話者が担当し、主に紙媒体を用いた添削活動を行っているのがいぜん主流である。しかし、受講者が英語の習熟度の低い学習者である場合、こうした授業スタイルでは、教師の膨大な労力にもかかわらず、それに見合うだけの効果は得にくい。学習者と指導者の双方が、手探りの状態に置かれていると言っても過言ではない。

要因として次の2点が考えられる。各要因についてその直接的影響を併せて述べる。

学習者の習熟度が低すぎる→学生のアウトプットは教師にとって想像を超えたものである。特に日本語文法の知識がない教師には、なぜそのようなエラーが生成されるのか想像もできない。

指導の目標点が明らかでない→教師は何もかも添削したくなる。あるいは、何から手をつけてよいかわからない。

### (2) 学習者コーパスをめぐる状況

英語教育分野においては、学習者のアウトプットを収集した、さまざまな学習者コーパスの構築がすでに行われ、成果も発表されている (ICLEv2、NICE など)。しかし、次の点において、上記のような問題要因の解決のために有効な提案はいまだになされていないと考えられる。

既存の学習者コーパスは、比較的「できる」学生のアウトプットで構成されていることが多く、分析手法も母語話者のアウトプットとの比較の観点でなされる傾向がある。そのため、それらコーパスを利用した調査から得られる提案は、中級習熟度以上の学習者がより母語話者に近づくための方略を探索するものとなっており、習熟度の低い学習者には直接的な応用が困難である。

主たる学習者コーパスは、構築のためにはコンピュータシステム等の専門的スキルを必要とすることから、また、データ提供者等に謝金を出す必要があることから、資金を集中的に投入した大規模プロジェクトの成果であることが多い。成果物としてのコーパスの質は高いが、個々の教員が授業環境に合わせて持続的なデータを蓄積していくような仕組みにはなっていない。

## 2. 研究の目的

大学新入生の英語力低下が指摘される今日、英語作文能力を育てることは大学英語教育の使命のひとつである。本研究は、従来の

英作文指導の方法では効果を上げることが難しい、習熟度の低い学習者の場合に絞りを、克服されるべき問題点を整理し、優先順位を明らかにすることを目的とする。日本語を母語とする学習者の生成する中間言語を資料として継続的に収集し、そこに観察される母語からの統語的借用現象を分析し、その結果に基づいて、効果的な指導方法を提案することを目指した。

## 3. 研究の方法

4 年間の研究期間中に、山内と内田はそれぞれの授業と関連させた学習活動を実行し、そこから自分のクラスの作文データを収集した。もともと授業で用いている LMS (学習支援管理システム) やブログで、日常的に教員と受講生、あるいは受講生どうしがコミュニケーションを行いつつ、そこで生成される作文データを、高度に特殊な専門スキルを要しないような方法でデータベース化してきた。

それと並行する形で、蓄積したコーパスデータを調査対象として誤用分析を進めた。学習者の生成する英文の誤りの大きな要因として、母語 (日本語) の文法の借用が大きくかかっているのではないかという仮説を検証してきた。

さらに得られた知見に基づき、学習者支援に役立てる方法を模索してきた。

## 4. 研究成果

実際に自分が教えている学習者の作文をデータ化することは、紙に入筆してそのまま返してしまうのとは違って、指導のうえで二重の意味で意義がある。ひとつは、学習者ごとの傾向を見わたすことが容易になる。複数の課題にわたって同様の傾向の誤りを生成していることに気付きやすい。もうひとつの点として、特定の現象に絞ってデータを分析する作業を効率的に行うことが可能になる。さらに、その分析に基づいて、指導の焦点を絞り、実際に学習者の書いた文を例としたフィードバックを授業中に行うことができる。

たとえ 1 人の教員が自分の授業から収集するデータであっても、ある大きさを超えるとコーパス言語学的手法をあてはめることが可能になる。本研究では、ワードリストの生成、be 動詞の各活用形はじめ特定の語彙要素の使用例の分析のためにコンコーダンサー、データベースソフトを利用した。小規模なデータではあっても、ひとりひとりの教員が、日常の授業を担当するなかで、持続可能な形でデータを蓄積し、日常的なツールやアプリケーションを使いながら学習者の生成物を分析できる、さらにはそれを学習者への指導に活かすことができる、という道筋を確認できた。

収集した作文データの誤用分析から明らかになったのは、習熟度の高くない、日本語を母語とする大学生が生成する誤りには、日本語の文法特徴が広い範囲で関わっている

という傾向である。特に、日本語の「XはY(だ)」構文は非常に生産性が高く、これに引きずられたと考えられる誤りは多岐にわたっている。また、日本語の自然な文章・談話においては既知の情報を省略することが無標の選択である、という事実も、学習者にとって、適切な照応表現の利用や節構造の組み立てを難しくしている。しばしば困難が指摘される動詞の項構造の習得についても、日本語の対応表現では異なる項構造となっている表現での誤りが多いことが分析から明らかになった。

これらの分析結果に基づいて、コーパス資料をいわば再利用する形で指導のための材料を作成した。学習者自身にとって身近な素材(自分やクラスメイトが書いた文)を用いた指導は修正フィードバックとして有効である半面、効率面で問題があり、運用上の工夫がさらに必要であることがわかった。授業支援(管理)システムの機能上の限界という壁もある。これらについては情報技術面での環境の改善を待って将来の課題としたい。

以上で述べた授業実践、データ収集、分析から得られた知見とその応用について、論文を発表し、学会発表を行い、最終年度には報告書を作成した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計 3件)

- 内田充美・山内真理・小島篤博「LMSを利用した学習者コーパス構築のための教室外英作文活動」『言語文化学研究 英米言語文化編』査読無, 7: 65-88. 2012.
- 山内真理・内田充美「日本人英語学習者の中間言語にみられる L1 の痕跡」『千葉商大紀要』査読無, 49: 43-56. 2011.
- 内田充美・山内真理「持続可能な学習者コーパスの構築を目指して」『言語文化学研究 英米言語文化編』査読無, 6: 71-88. 2011.

##### [報告論文](計 4件)

- 山内真理・内田充美・小島篤博「学習者ライティングデータの教育利用に向けて」当課題研究成果報告書, 査読無, 1-24. 2014.
- 小島篤博・内田充美・山内真理「学習者コーパス作成のためのテキスト抽出ツールの開発」当課題研究成果報告書, 査読無, 25-32. 2014.
- 小島篤博「Moodleによる授業支援システムの構築—大阪府立大学における事例—」当課題研究成果報告書, 査読無, 33-38. 2014.
- 内田充美・山内真理・小島篤博「大学生の作文データに見る L1 の痕跡—3年生以上選択科目の場合—」当課題研究成果

報告書, 査読無, 39-52. 2014.

##### [学会発表](計 17件)

- Mitsumi Uchida, Mari Yamauchi, and Atsuhiko Kojima. “Out of “house-made learners’ corpus”: L1-influenced errors made by Japanese university students.” Second Asia Pacific Corpus Linguistics Conference (APCLC 2014). 2014年03月07日. The Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong, China.
- Mitsumi Uchida and Atsuhiko Kojima. “EGP as the first step towards ESP: Combination of conventional and IT-based methods for compulsory English courses for first-year students in Japan.” Joint International ESP Conference 2013. 2013年09月29日. Fudan University, Shanghai, China.
- Mari Yamauchi and Takako Hashimoto. “Effective implementation of meaning-focused output activities for Japanese EFL learners.” JALT CALL 2013. 2013年06月01日. 信州大学.
- 小島篤博・内田充美・山内真理. 「大学教育における英文ライティング分析のための LMS データ抽出ツールの試作」教育システム情報学会 2012 年度第 6 回研究会. 2013 年 03 月 16 日. 山口大学.
- Mitsumi Uchida, Mari Yamauchi, and Atsuhiko Kojima. “Out-of-classroom writing activities on Moodle: Effective ways to collect data and provide feedback.” GloCALL 2012. 2012 年 10 月 20 日. Beijing Foreign Studies University, Beijing, China (Virtual).
- Mari Yamauchi, Mitsumi Uchida, and Atsuhiko Kojima. “How L1 syntactic patterns influence Japanese EFL learners’ output.” Asia TEFL 2012. 2012 年 10 月 04-06 日. Gurgaon, Delhi, India.
- 内田充美・小島篤博. 「Moodle を活用した授業外学習活動の運営と支援」第 4 回 Moodle の教育者と開発者による研修会 (MoodleMoot 2012). 2012 年 02 月 22 日. 三重大学.
- Mitsumi Uchida and Mari Yamauchi. “Analysis of L1-influenced syntactic errors in Japanese university students’ writing.” The Hawaii International Conference on Education. 2012 年 01 月 05 日. Waikiki Beach Marriott, Hawaii, USA.
- Mitsumi Uchida. “Creating personal bonds among students through outside-class writing activities using LMS: A test case report from an English classroom at a Japanese university.” The Hawaii International Conference on Education. 2012 年 01 月 07 日. Hilton Waikiki Beach, Hawaii, USA.

Mitsumi Uchida. “Introducing intermediate-level Japanese university students to World Englishes.” The Third Asian Conference on Education 2011. 2011年11月28日. The Ramada Osaka.

Mitsumi Uchida and Mari Yamauchi. “Small-scale building of learner corpora for study of syntactic errors made by Japanese learners of English.” Learner Corpus Research 2011. 2011年09月17日. Mercure Hotel, Louvain-la-Neuve, Belgium.

Mari Yamauchi and Mitsumi Uchida. “The influence of L1 syntactic patterns on Japanese EFL learners’ interlanguage grammar.” Asia TEFL. 2011年07月28日. Seoul KyoYuk MunHwa HoeKwan, Seoul, Korea.

Mari Yamauchi, Mitsumi Uchida, and Atsuhiko Kojima. “Detecting the influence of L1 syntactic patterns on Japanese EFL learners’ interlanguage grammar.” The International Academic Forum. 2011年06月12日. The Ramada Osaka.

Mari Yamauchi and Mitsumi Uchida. “Overcoming barriers to student engagement in using English online.” The Japan Association for Language Teaching. 2011年06月05日. 久留米大学.

山内真理「英語を「使いながら学ぶ」ための Forum 活用」第3回 Moodle の教育者と開発者による研修会 (MoodleMoot 2011). 2011年02月22日. 高知工科大学.

Mitsumi Uchida and Mari Yamauchi. “Detecting Japanese syntactic traits in lower-level learners’ written English Production.” The 9th Hawaii International Conference on Arts & Humanities. 2011年01月10日. The Mid-Pacific Conference Center, Hawaii, USA.

山内真理・内田充美「日本人英語学習者の中間言語の特徴 —持続的な学習者コーパス構築を目指して—」外国語教育メディア学会 (LET) 関東支部 第125回研究大会. 2010年12月04日. 首都大学東京.

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

内田 充美 (UCHIDA, Mitsumi)

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：70347475

### (2)研究分担者

山内 真理 (YAMAUCHI, Mari)

千葉商科大学・商経学部・准教授

研究者番号：40411863

小島 篤博 (KOJIMA, Atsuhiko)

大阪府立大学・現代システム科学域・准教授  
研究者番号：80291607